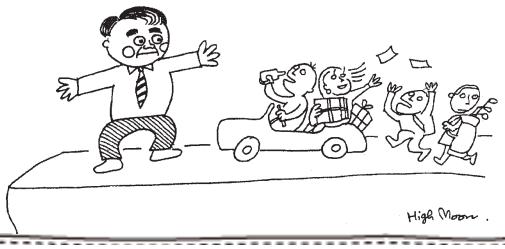
環境文明社会づくりあれこれ(41)

源流（41）

加藤　三郎

これまで廃棄物・浄化槽行政に全力で向き合ってきたが、その過程で私を理解し支援し続けて下さった方が、任務を離れた後も私の豊かな「人脈」となっていることを今も実感しているので、しばらくその点に触れてみたい。

やはり真っ先に語るべきは藤村コノヱさんであろう。彼女は教育学部を卒業後すぐに郷里の別府市に戻り、小学校教員からキャリアをスタート。それを１～２年続けた後に東京に戻り、当時の環境庁環境影響審査課の臨時職員となり、後の「環境教育」のスペシャリストとなる第一歩を歩み始めた。その後、全浄連事務局の職員となったが、そこでの彼女の仕事の一つが、今も刊行されている「全浄連ニュース」の編集。それである日、環境整備課に私を訪ねてきて、「浄化槽行政の方向性」についての寄稿依頼があった。当時の私は超多忙だったので、「寄稿はとても無理だが口述なら」と返事した。すると、数日後に録音機を持ってやってきたので、私はそれらしいことを吹き込んだ。当時は彼女の能力を全く知らなかったので、おそらく完成には２～３週間かかると思っていたが、２～３日後、ワープロ打ちの草稿が届けられた。それを見ると、私の発言が的確にまとめられており、彼女の能力の高さを初めて知った。

全浄連には数年間在籍したが、事務局にやってくる中小企業の社長さん方にとって、女性職員は「お茶くみ」程度の扱いだったので、彼女は全浄連を去った。その後、コンサルや環境関連の雑誌社などで働いたが、いずれも「満足できない」と相談があり、「それなら自分でやるしかない」と助言したところ、早速環境と教育を結び付けた環境教育専門の会社を設立。そうした会社などまだない時代だったため、環境庁、東京都、神奈川県、茨城県、川崎市、四日市市などから仕事が沢山舞い込み、二人の有能な女性スタッフと、会社としても盛り上がった。

93年夏私が役所を辞め、WHO元職員鈴木猛博士、元日環センター総務部長古谷野加代さん、コノヱさん、彼女のコンサル勤務時代の後輩荒田鉄二さん（現鳥取環境大学教授）の５人で、現在のNPOの前身「21世紀の環境と文明を考える会」を立ち上げた。コノヱさんはその時以来の同志・同僚であり、今は当会代表を立派に務めているのは会員の皆様も認めて下さっていることと思う。私から見たリーダーとしての彼女の特色は、相手の社会的地位や名声などに一切とらわれず、その人の本質を見抜いて対応すること。例えば、会報原稿を依頼しても、市民目線から見て難しすぎたり、編集方針に合わないなら、相手がどんなにエライ人でも、よく説明して書き替えてもらう。会報だけでなくグリーン連合の『グリーン・ウォッチ』の実質的編集長も６年間務めたが、全く同じ方針を崩さなかった。彼女は正義感が強く、とにかく老人、子供、ペットなど弱いものへの共感も強い。通りですれ違った見ず知らずの幼児や子供などにも積極的に声をかけ、大事にする真の教育者だ。私が10年以上前から、環境分野での女性の役割の重要性を強調するようになったのも、彼女の活躍振りを見たことが大きい。